



我高津の前に強敵兵庫果立工業高校が現われ、シソーゲームを繰りひろげ、勝利は掌中に落ちたかと思われたが、勝利の女神は我高津に微笑まず、惜敗した。しかし、小生に一番あざやかに残っている試合は、いつたん引退？した三年生まで繰りだして戦ったその年の全日本高校選手権大阪予選の決勝、相手はしぶとい三國ヶ丘高、まさに宿敵というべし。梅雨も明け、初夏の陽ざしがにわかには消え、曇って、車軸を流す様な雨、あわや試合は流れるかと思われたが、一時間以上も降った雨はピタッと止み、レフリーの木イスルは鳴った。しかし、ぬがるんだ地はスパイクを用なしにした。三國ヶ丘は意地の汚ないフリースローを繰りかえし、ペースを乱した。時間は残り少なくなるが一点の差で追う。フワードのシートもバーにはかり当る。時間ばかり気になつた。しかし、遂にタイムアップを宣するホイッスルがなつた。全身の緊張は解け心身ともにがっくりしたものであつた。こうして振りかえつてみると部史の何分の一かに参予しただけであるが、意気深きものがあつた様だ。スポーツを楽しまつてもりで入部したのが何時の間にか鍛錬されていた。最後に、高津のハンドでなく、ハンドの高津を維持されん事を期す。

三年生

和 精神力

松倉 建樹

部誌創刊おめでとうございます。創刊号に寄稿できると言うのは僕にとって最大の喜びであり、且つ高校三年間のうち数少ない想い出の一つとして心に残る事と思つています。この機関誌を通じて、高津ハンドボールの技術向上を、いやむと大切な事である先輩諸兄姉と現役部員との間をもっと緊密に、即ち、人間的、社会的にも「和」を達成する事が、この部誌の役割だと信じます。そこで創刊号に寄稿するにあたり、僕は、「和」について、又、それに付随して、「精神力」ということについて少し書いてみた。「和」即ちチームワークである。これ程、言行一致の難しい言葉はそう多くあるまい。チームワークというものがいかに大切であるかというのは衆知のことである。僕は主将をしていた関係上、より一層心にこびりついている。この原因には、二つあると思う。まず、第一に一年が二年に、二年が三年に頼りすぎていることである。何事につけてもそうである。例えば、少しきつい練習の翌日等、今日は体の調子が悪い？から」といつ